

文芸

俳句

郭公かうこうの一声浴びる安房の山 池田 逸子
 封筒にすかし窓あり梅雨晴間 伊藤 敬子
 一つ身の浅間詣でスニーカー 今関満喜子
 梅雨晴間猫は狭庭で狩りをする 魚地 照子
 告げざりし一ト言今も沙羅の花 江森 悦子
 はや八十否まだ傘寿けさの秋 川島 通則
 炎天の関東ローム豆の味 向後 寛
 新涼のふれあいサロン竹太鼓 越川せつ子
 新益の提灯叩く黒揚羽 小松 藤男
 ふとよろけ頑迷固陋がんめいこうろうの端居かな 佐瀬 輝夫
 稲穂垂れ囃子稽古の佳境なり 椎名万里子
 蚊を打つてなほうなる声枕元 市東富美江
 病葉の落ちて緑の深まりし 鈴木とし子

子等の声元気もらいて夏終る 土屋美枝子
 診療日庭の季を挽ひでゆく 土屋 義昭

ほととぎす姿見えねど空をとぶ 戸村 静華

かまきりや生まれてすぐに斧おのかざす 早川 勇

川幅を使いきつたる梅雨大河 藤田 雅夫

短歌

音立てて冷麦啜るふたり膳 越川 義則
 涼風受けて昼のひととき 内藤 くに
 我が時代プールに水着もなく育ち 泳ぎし川の思ひ出多し
 水といふ不思議なるもの今朝もまた 五臓六腑に沁みわたりたり 高梨 キヨ

畑より帰る途中の道沿ひに 木陰求めて自転車を降る 押尾 輝子

夕焼けと虹の架かりし大空の 東と西を交互に見つむ 浅野 榮子

艶もつマンゴー卓にのせたり 置いたはずの財布かざりがないとくり返す 田崎 尚美

友はこの頃惚ほけの兆きざしすか 思ひ出の詰まりし着物引き裂ききて 青木 秀子

裂織布さきおりぬのに作りかへゆく 石畳いしだまの傍かたへにそぞろ咲きたりし 八角 三枝

待宵草まちよぐさが一日ひとひに閉づる 偶然ごうぜんに色抜けしとふジーンズを 鈴木まさ子

友は流行はやりとはきこなしたり うす紅の睡蓮の咲く葉の陰に 椎名美枝子

金魚ちらちら泳ぐが見えり すれちがふ船舟に笑みて手を振る児 加瀬 弘子

どこか女孫むすめに面輪めんりんの似たり 朝六時をはや白鷺しらぎは朝食の 芹川 初子

鯛いわしとらふと海に向かひぬ 齋藤つね子

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

9月 新ペン習字クラブ
 10月 涼風生け花クラブ

◎文化会館ロビー展

9月 アートレイアウトクラブ
 10月 俳句会、生け花クラブ

◎サビア展

9月 展示なし
 10月 横芝写真クラブ

◎銚子商工信用組合展

9月 アート押し花クラブ
 10月 水墨画クラブ



中世武士の身だしなみ

二十年前前に発掘した篠
 本城跡から様々な遺物が出
 土したことは、これまでに
 何度か紹介した。今回は銅
 て作られた細長い出土品を
 紹介する。

これは筭(こうがい)と呼
 ばれるもので、長さ10cm、
 幅1cm程の板状で、上部に
 小さい突起があり、下半分
 が先細っていて、先端は欠
 損している。表の中心に線
 があり、強度と文様を兼ね
 たものであろうか。

この銅製の道具は、主に
 武士が髪をとかしたり、頭
 のかゆいところを搔くとき
 に使用し、また上部の突起
 は耳かきになっている。そ
 して刀の鞘(さや)に小柄と共に差
 し、携行したもので、女性



▲筭(こうがい)

(社会文化課 道澤 明)